

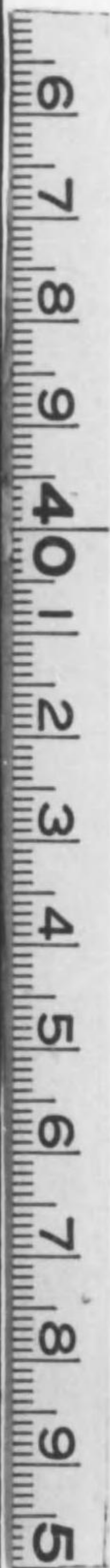
344

344-86



1200501401459

足利学校釋奠講演筆記
第一卷



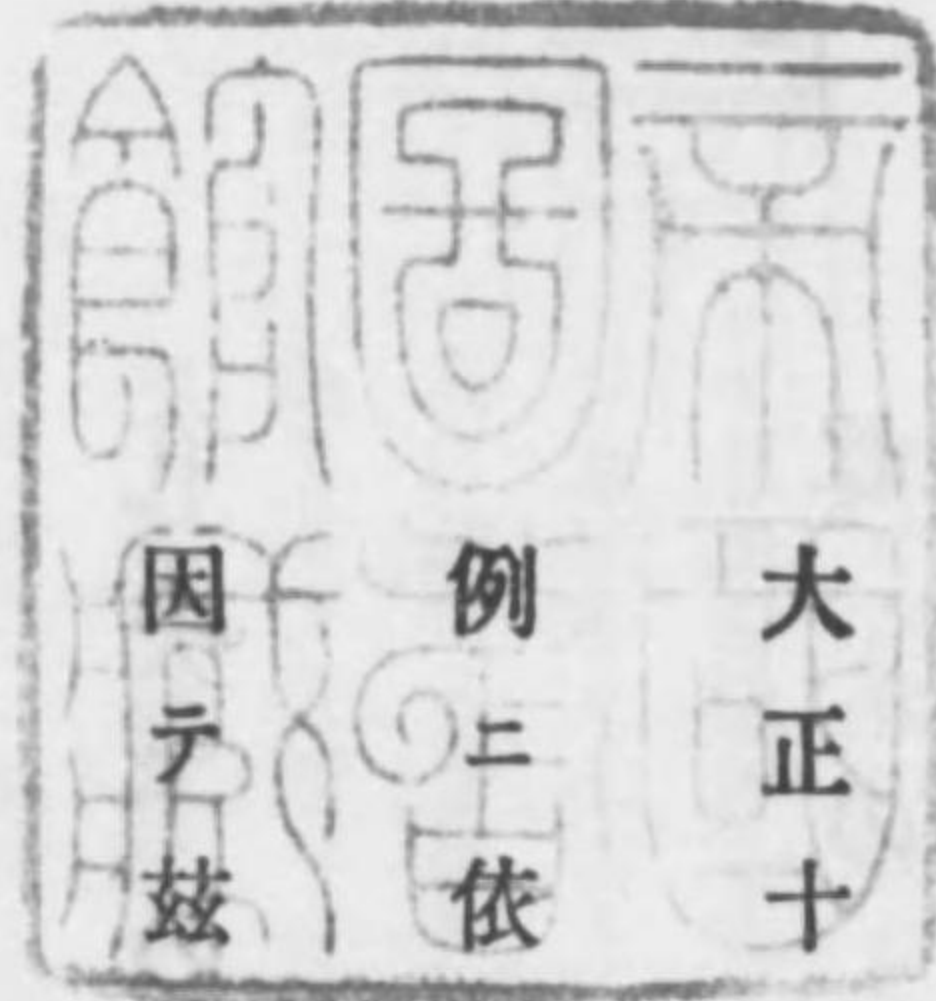
始



足利學校釋奠講演筆記

第十六卷

344-86



緒言

大正十五年十一月二十三日足利學校遺蹟ニ於テ恒
 例ニ依リ釋奠略式ヲ執行シ併テ講演會ヲ開催セ
 因テ茲ニ其講演筆記ヲ刊行ス



昭和二年十一月

足利學校遺蹟圖書館

目次

孔夫子の宗教意識

文學博士

加藤 玄智 先生

眞人の偉人

文學博士

吉田 靜致 先生

孔夫子の宗教意識

文學博士

加藤 玄智 先生

只今開會の辞がございましたが、今日は例年に倣ひまして釋奠の後に講演會を開かれるので、私にも出て何か申上げるやうにと云ふ御話で伺つた次第であります。我國に於歴史的に極めて有名な此の學校で又東洋の文教の上から言つて我々日本人と致しましても祖先以來聖人として仰いで居ります孔夫子の御祭典に列する光榮を得、且つ此の席で諸君に見へると云ふことは如何にも光榮と感じますし、又同時に私の如き菲才淺學、修養も足りませぬ者が、孔夫子の釋奠の隙に御話を申上げると云ふことは、自ら顧みて何となん恐縮に堪へない次第であります。併ながら既に御承諾を申上げて居りますし、又私も子供の時分から新しい教育の古い教育を半分半分受けた人間で、矢張り小さい時分には漢學の塾などにも居り、又四書五經等に依つて子供の時分に教育をされました三ツ兒の魂百迄で、矢張りさう云ふ時分のことか今日の私を矢張り支配して居るやうな感じがするのであります。論語や大學の素讀をさせられました。其の言葉が今でも記憶に遺つて居ります。私共別に専門にやつたものではありませんが、子供の時分からさういふ教育を受けた、其の言葉が頭の中に多少今日でも残つて居つて、それが知らず識らず無意識に我々の行ひを

左右して居るやうな感じがする。夫等は皆矢張り元を考へて見れば孔夫子の餘徳と言はざるを得ないと思ふ。さういふことを考へて見ますと此の釋奠の跡に何か話をせよといふ御要求に應ずることは、寧ろ私の方から御願をして出ても宜いので、長い間知らず識らずの内に聖人の教が我々の頭の中に浸潤して居り、若しそれがなければ人生の行路の上に一步を誤らぬとも限らぬ場合が多々あつたらうと思ふ。それ等が矢張り孔夫子の言葉などが頭の中にあつて、其の影響が幾分か良い方に我々を向けて行くことは、日常生活の上には知らず識らずの感化が決して尠くないと考へる。私は小さい中に短氣な人間でありまして、九俎の功を一簣に缺くといふやうな教を能く想ひ出してはさういふ際に自分を抑へて行くといふやうなこともあつたことを今でも記憶して居ります。さういふことを算へて見れば随分あるだらうと思ふ。此等は全く儒教の教が我々の實際の生活を支配して呉れた事實でありまして、此の點に關しても聖賢に向つて感謝の意を表さなければならぬといふことを段々年を取るに随つて想ひ廻らして來るやうな次第であります。

(一) 世界宗教史上に於ける孔夫子の位置

併ながら私は夫だけのことでありまして、自身の専攻して居る學問は宗教學で、其の方面から今日は神道の方面のことに研究を進めまして、今自身が關係の學校に於て講じて居りますのは神道の講座の方面を擔任して居るので、孔夫子の教とは無論縁故のないことではありませんが、多少方面が違ふので、其

の意味に於て専門家の御話を諸君が御要求なされるとすれば、私の話は當らぬのであります。併ながら比較宗教即ち宗教學といふ方面から考へまして、西洋人が比較宗教若くは宗教史の上に於て孔子の教を取扱つて居る。世界の宗教史を書きまして、或は希臘の古い宗教とか、露西亞の古い基督といふものを取扱つて、支那に參りますと支那では矢張り孔子を中心として居ります。儒教それから老莊の教若くは後には道教、さういふやうなものを矢張り宗教史の中に扱つて居る、西洋人の目から東洋を研究して印度の方面に來て佛教を扱ひ、更に東に進んで支那に參つて昔からの教を扱ふとすれば、矢張り儒教は宗教史の中より除く譯には行かない。そこで宗教の歴史を叙する中に儒教即ち孔子の教も同じ様に叙して、或はマホメツトとか或は耶蘇とか或は釋迦とかいふ人と同様に孔子の傳記も其の中に編み込んで居る譯であります。詰り西洋人の目から見れば儒教といふものの開祖は孔子でありますから、此等が矢張り支那の一の宗教史といふ風に西洋人の目には映ずるといふことが、彼等が世界の宗教史を取扱つて居る上に於て明かに見えると思ふ、老子もさうでありますがさういふ風に見て居る。世界の宗教を外國人が比較して孔子の教を眺めて見ると其處に宗教的の方面があると考へて、少くも支那人の一の宗教であると考へて孔子を扱つて居ることが能く分ると思ふ。西洋人はさういふ風に孔子を見て居る。

(二) 孔 夫 子 の 教

所が佛教は無論宗教であり、基督教も無論宗教であるが、儒教になると是れは宗教といふよりも寧ろ徳教である、道德の教である、政治の教であるといふ風に觀た方が穩當であつて、詰り佛教とも餘程違ふし又基督教とは無論のことでありますから、是れは宗教ではないといふ風に分類した方が穩當であらうといふので、日本の學者は孔子の教に對してはさういふ態度を取つて居るやうに思ふ。即ち日本の學者の態度からいへば孔子の教は宗教には入れない、併し立派な道德の教であると斯ういふ風に見て居るのでありますそれは佛教なり或は基督教に比べると餘程違ふ方面がある、其の爲めに日本の學者はさういふ風に見て、寧ろ道德の教と考へてゐるやうであります。今日の日本の學者はさうであります、徳川時代の學者は一方には神道があり一方には儒者があつて、此の二者が聯合して佛教に對抗する有様で、寧ろ佛教と一語になつて宗教の方面に這入つて仕舞ふといふことが嫌ひで、之と違ふことを發揮したといふ要求が徳川時代の儒者には一般にあつたやうに思ふ。随つて孔子の教は道德方面を鼓吹して、宗教的方面は全く之を考へない。さうして佛教とは全然違つたものであるといふことを鼓吹するを以て儒者の特色としてゐるやうに思ふ。さういふ立場でどうしても日本人の習慣からして、今日まで孔夫子の教を取扱つた多數は道德の教政治の教と見て、宗教とは見ないといふ考が勝つて居るやうに思ふ。其の點に於て今日の西洋の學者が孔子の教も矢張り宗教の中に入れて取扱ふのとは相違があるやうに思ふ。併し西洋の人も無鐵砲のことを言ふのではない、相當に考を積んだ上で世界の宗教史を編む時には矢張りそれに入れて置かうといふので

ありますから、其處には何等が觀る所があるに相違ない。其の點から私の專攻の學問である宗教學上の考察を孔子の教に對してどの點まで徳教の方面があり、其の要素を備へてゐるかといふことを、今日の釋奠に際して聊か申上げて諸君の御參考に供したら何うかといふ考を以て出ました。

(三) 宗教とは何ぞ

さうなりますと全体宗教といふものは何であるかといふ問題に第一に逢着するのであります。之を宗教と見るか宗教と見ないかといふ問題になりますならば、全体宗教とは何であるか、是れが定らぬことにはそれが宗教であるとかないとかいふ議論は出來ないことになりませんが、先決問題として然らば宗教とは何だといふ問題を申します。是れは宗教學者若くは比較學者の御答すべき根本問題であると思ふ。言換ふれば種々の宗教が世の中にある、それを比較研究して參つた結果、畢竟宗教はどういふものであるか、斯ういふ事に到達するのであつて、其處に宗教とは何ぞやといふことも起り、宗教の定義も出來て來るのであります、要するに宗教學者や宗教學專攻の領分であると思ふ。併ながらそれは浩瀚なる宗教學の研究の結果、其處に達するのでありまして、一朝一夕に簡單に申すことは極めて難かしいのであります、私共宗教學者が研究した結果、宗教とは何であるかといふ問題を先きに申さうと思ふ。

宗教とは畢竟何であるかと問はれますならば、宗教學者は斯う答へたいと思ふ。宗教といふものは神

と人間の特殊の關係である。是れは一番簡單明瞭な返事であると思ふ、極めて陳腐であり極めて詰らぬ返事かも知れぬが、宗教學者が種々の宗教を研究した結果到達する返事は畢竟それに外ならぬ。宗教とは何であるかと申しますると、神と人間の特殊の關係、之を宗教といふのが一番簡單な返事であると思ふ。其の返事を我々學者の方面から多少専門に亘つた言葉で申せば宗教の形式的回答といつたら良いと思ふ、形式的で宗教といふものを總て引括めて、どの宗教にも通じた所で宗教とは何であるかといふことを考へて見るならば、宗教とは神と人間の特殊の關係で、其の神は必ずしも基督のやうな神様や、我々が言ふ八百萬の神様ばかりに限らない。南洋に行けば野蠻人の内に幼稚な宗教があつて、幼稚な神様を信じてゐる。さうかと思ふと佛教などには哲學の理屈が織込まれて居つて、哲學だか宗教だか分らぬ位に進んでゐるのでありまして、さういふ佛教の教大乘哲學の三昧の中に現はれた本尊、佛教的にいへば佛であります。更に言換へれば宗教的の對照、それ等を皆引括めまして假りに之に神といふ名前を與へるならば、神と人間との一種の關係を附けること、それが宗教であるといふことは、どの方面から考へて見ても先づ過のない宗教の概念であると私は考へる。所がそれは今申す通りどの宗教にも當嵌る定義である代りに餘りに、ボンヤリしてゐる神と人間の一種の關係といふが、それはどういふ關係を言ふのか、斯ういふ問題になつて少し内容に觸れて考を進めて行くと、全體宗教には或る方面から觀察すると二つの方面があると思ふ。一は神人同格教といふ範圍に屬する宗教である。神人同格といふ名前を學者が附けるのであります。それに

反對した方面の宗教は之を神人懸隔教といふ、神様と人間で其の間が非常に懸隔して、天地雲泥の違ひがある。斯ういふ風に考へて人は如何ほど努めても決して神になることは出来ない。神が人間の形を取つて現はれることもなく、神と人間とは根本に違つて居る。神は九重雲深い所に居つて逆も人間の眼を以て見ることの出来ない、全く生活してゐる世界が違ふものであると考へる。千里の差があるやうに考へるから神人懸隔といふ。此二つの潮流が世界人類の宗教を二分して流れてゐるやうに思ふ。丁度日本の近海が暖流と寒流が流れてゐるやうに、世界の宗教界は神人同格教と神人懸隔教といふ二種の潮流があるやうに思ふ。

懸隔教の中からは基督教が流れ出してゐる、基督の前の教である猶太教に溯つて考へると、益々懸隔教が明瞭に見える。書物でいへば新約全書は基督の教であります、舊約全書に溯ると茲には神人懸隔教の特色が現はれてゐると思ふ。それからマホメット教、之を見ると矢張り神人懸隔教であるといふことが能く分る。猶太教にしてもマホメット教にしても、將又基督教にしても、此等は民族の上からいへばセム民族の中に行はれた教である。アリアン民族とは餘程違つた文字を使ひ、西洋は左から書くが、セム民族は右から書く。其の民族の中に現はれた宗教の特色は懸隔教で、神と人間の間を離して考へる流儀の宗教である。それでありますからマホメット教にしても神の教を傳へる、神から言へば神に仕へて居る僕に外ならぬので、決して神の子でない。況んや神それ自身であるといふことはマホメットは決して言はぬのであ

ります。寧ろ耶蘇が神の子であるといふことに考へて居つたことに論及して、それは神を汚したものである、神と人間とは離れて居る、到底神になるべきものでないといふのが特色であります。

之に反して同格教は人間も直に神になることも出来る、神も人間の形を以つて現はれることが出来るといふのであります。例へば同格教に於て矢張り其の教の勢力を有つて居るのは佛教であります。印度に起つた佛教で日本にも傳つて相當勢力を有つて居りますが、此の日本に實勢力を有つて居る佛教は神人同格教の極めて良い標本である。元は一國の王子に外ならなかつた釋迦其の人が既に佛になつて居る、印度でいふ佛、支那に譯して佛陀、宇宙の大真理に徹底したといふ意味で覺者といつて居りますが、是れは印度人が宗教的天才であると同時に哲學の人間であり智識の人間であつた釋迦のことを佛陀即ち覺者といつたのであります。佛を宗教上の言葉に直せば神といつて差支ないと思ふ。釋迦の前に婆羅門教といふものがあつた、それが理想として居つたのは梵天で、梵天帝釋天といつて帝釋天と並んで梵王といはれて居る神様、それになることを釋迦以前の婆羅門教は理想として居つた。所が釋迦は一步を進めて梵天に崇高な意味を與へて、其の梵天に自らなつたといへば、宗教上から明瞭簡單になると思ひますが釋迦は神になつた。要するに宗教學上一般の言葉でいへば神になつた、そこで神佛といふ言葉を使つて居りますが、釋迦といふ人間が神の位地に上つたのである。其の系統を承け繼いだ佛教、顯教に於ては見性成佛といふて、自分の本性を見開ければ自分は直に佛になれるといふ立場でありますから、是れは神人同格教の教になる

と思ふ。弘法大師が即身成佛をお説きになつて、此身此儘大日の現はれであるといつたのも、人間と神の間が離れないものであればさうなつて行くとと思ふ。印度のアリヤン民族の思想の潮流はさういふことになつて居る。同じアリヤン民族でも希臘は神人同格教になつて現はれて居ります。

西洋では基督は西の歐羅巴邊に入つたのであつて、今から二千年ほど前に耶蘇が出て基督教を説いて白色人種の宗教になつたが、其の前に希臘の文明があつた。それは基督とは様子が違つたアリヤン民族の特殊のものを有つて居つた。是れも神人同格教であります。羅馬になりますと天皇を矢張り神として崇拜した。我々は之を天皇崇拜といふ名で呼んで居りますが、此等の天子様は生きて居る内から神としての禮儀を受けておいでになる。それからアレキサンダル大王、是は希臘に生まれてさうして埃及も征伐すれば印度の方面にまで軍を送つて居る、世界統一の偉い英雄であります。是れが東西の文化を融合調和することを禁じた結果、自分はゼウス、ノボロンの化身であると稱して居つた。其の二つの神が自分の身に現はれてアレキサンダル大王となつて現はれたといふのである。是れは神人同格教の良い例だと思ふ。アリヤン民族の潮流はさういふ風に現はれて居る。我々が最も興味を惹くのはホリオルテペスといふ人は生きて居る内から神を祀つる段を設けて人を神にまつたといふことが書いてありますが、是れも神人同格教の特色を最も能く現はして居ると思ふ。

日本の宗教は神人同格教であるか、懸隔であるか、殊に神道は同格教か懸隔教かといふと、同格教に近づいて居ると思ふ。それであるから日本に於ては古くから天皇崇拜或は偉人崇拜といふことが行はれて、色々の英雄を神に祀つて居る。楠正成が死ねば之を祀つて湊川神社が出来、或は東照大権現として徳川家康を祀るとか、或は豊國神社として豊臣秀吉を祀るとか、或は兼勤神社として織田信長をまつるとか、護王神社として和氣清麿をまつるとか、是れも神人同格教思想の系統であると思ふ。矢張り日本に於ても羅馬や希臘と同様に生きて居る内から神にまつるといふことがある。之を生まつりといつて居りますが、それが日本にある。殊に私の注意を惹いたのは足利の町に近い所に此の思想がある。これは天明の頃に生きて居らるゝ方がまつられた、亡くなつたのは文政であります。金井半之丞といふ方が生まつりとして足利に近い所にまつられて居るといふことで、今日は其處にもお参りをして歸りたいと思ふのであります。斯の如き生まつりがあるのは神人同格教で、神と離して考へない、人間でも偉い人は神であるといふ一の宗教の潮流であると思ふのであります。

世界の宗教は佛教と基督教を對立して考へると、斯ういふ風になつて神人同格教と懸隔教に別れる。先程申した神と人間の特殊の關係は、懸隔教に於ては神と共に居るといふ精神状態、我々が斯うして諸君と御

話をして居るけれども、諸君と私だけの關係ではない。眼には見えないけれども矢張り神が見てお出になる、神の前の行動であるといふことを信じて来る。所で神人懸隔教から云へば一人で仕事をして居るのではない、神と共に働いて居るのだ、朝早く起きて畑に行つて草を取つて居るのも一人でやつて居るのではない。神と一緒に働いて居るのを神と人間の特殊の關係と申したので、其の考になつて現はれて来る。同格教に於ては神と人間が一つになつて仕舞ふのでありますから、神と人間の融合歸一の意識といつて良いと思ふ、我即ち神であるといふ感じが起つて来る、以心傳心見性定佛となる譯でありますから、迷へば凡夫であるが悟れば其の人が直に神であるといふので、神と人間が一つになつた状態、さういふことを唯だ理屈の上で知るのでなくして、それを體驗する、疑はんとして疑へない、心に體驗をするといふのは心の眼で見て居ると考へる所に宗教が現はれて来る。さういふ神と人間の特殊の關係、神と人間の融合歸一は神人同格教の特色、神と共にあるといふことは、神人の接觸道交と申すのであります。其の意識が宗教意識の一の特色であると思ふ。それでありますから神人懸隔教から見ても同格教から見ても、神と人間の一種の關係と見ることが出来るのであります。

宗教を斯ういふ風に觀察して来ると、矢張り神社といふものも宗教の中に入つて来る。勿論宗教を佛教基督教だけに限れば、神社などは宗教の中に入りませぬが、今申したやうな意味で廣く宗教を解釋して来れば、神社に行つて拍手をして神をまつるといふことも、矢張り一種の宗教意識の現はれであります。

日本の神道が宗教であるか、ないかは常に問題になりますが、其の上にも孔子の教である儒教といふやうなもの、それにどれだけ宗教の意味が入つて居るか、西洋の人は宗教史の中に入れて居りますが、それを明にするのは日本の神社が宗教であるか、ないかといふ問題を決するにも大切な考證になるといふ考から、孔夫子の教がどういふ意味で宗教といへるかといふやうなことは、我々日本の宗教學者としてどうしても考へなければならぬ問題で、此の點に於ては平素からして非常な注意を以て、孔夫子の宗教意識に就て時々昔讀んだ書物を頭に浮べて考へて居る。そこで今日は少し精しく申上げて諸君の御參考に供したいといふ考になつたのであります。

(五) 孔夫子の教の分拆

さういふ風に見て置きまして、孔夫子の教が全体どういふものであるか、少し内容に立入つて分拆して考へて見たいと思ふ。我々宗教學者が世界各国の宗教を研究して見ると、茲に一つ面白い我々の注意を惹く事實が発見されるのであります。幼稚な民族で文明が未だ進んで居らぬ民族の宗教は言ふ迄もなく有の儘の信仰の現はれであるから、自然的宗教といふ名前を付けてありますが、山には山の神があり、川には川の神がある、日月星辰山川草木、之を支配して居る神があるといふ風に多くの神を造る、或は亞弗利加の野蠻人の間に行つて見ると、海岸に行つて貝殻のカケが落ちて居る。それが太陽の光線に反射す

ると非常に美しい光を發する、是れは何か不思議な神力が籠つて居るに違ひないと考へて、其の貝殻をお守りにする、是亦一種の宗教で之を事物崇拜といふ名前を付けて居るのでありますが、随分神の數も澤山あるし、又文明の人から見れば何だか迷信のやうにも考へられる貝殻の一片をも神として大切にするといふ宗教意識も現はれて來て居る。進んだ宗教から考へれば幼稚であると思ふやうな信仰の形式が自然民族の中に澤山ある、其の間に立つて比較的大きな神の信仰を有つて居るといふことを人類學者が特に發見した。此等の野蠻民族が天神山神色々の神小さな神を信じて居るのでありますけれども、其の中に基督の神の壘を摩すといつても良いやうな比較的大きな神の信仰があるといふ事實を發見した。之を原始的唯一神教といふやうな名前を付けましたが、さういふ立場で古代の文明國に多神を信じて居る間に、比較的大きな信仰があるといふことを段々發見したのであります。

(甲) 孔夫子拜天の思想

支那に於ては天、孔夫子の考は論語等に依つて引照して申上げますが、天といふことは單り孔子に依つて發見されたのでなくして、支那人はもつと古い時分から天の考を有つて居つた。天若くは上帝と呼んで居りますが、天若くは上帝の信仰は原始的宗教の現はれであらう。斯ういふ風に支那を専門に研究する學者に於て意見を發表されて居りますが、恐らくさうでらうと思ふ。其の天の考を孔夫子は承け繼いで、そ

れを自己の信仰の中心に入れて居つたと考へる。詰り孔夫子の拜天の思想はもつと前の支那人の間に原始的唯一神教として存して居つた神の考を承継いで遂に孔夫子の拜天の思想となつた。斯ういふ風に考へたいと思ふ。

(乙) 孔夫子の天とは何ぞ

それでありますから孔夫子の所謂天といふのは原始的唯一神教の意味で、山には山の神があり川には川の神があるといつた風な神よりも餘程大きな神様であります。而も實際の信仰としてはさういふ大きな神は餘り大き過ぎて幼稚な自然民族は其の神の觀念だけは有つて居るけれども、實際に其の信仰を充分に發揚することが出来ない。矢張り斯ういふ形式があれば其の形式を守つて居る。山があれば其の山を恐れて居る。富士山には富士山の神があり、筑波山には筑波山の神がある。斯ういふ風に考へて實際彼等の考は多神教である。それで原始的唯一神教といふものは、大概是天だけの考でありまして、若くは萬物の創造者とか主とか高尚な意味を付けて信じて居るやうであります。さういふ比較的大きな神の信仰は實際に働いて居ない。實際に幼稚な民族の精神を支配して居るのは、何處其處の山にどういふ神がある、どういふ川にどういふ神がある、さういふのが支那人の古い時から有つて居つた考、上帝の信仰も恐らくそれであつたらうと思ふ。それを承継いで孔夫子は其の天の信仰をもちになつて居りますから、孔夫子の天

といふことは最も能く其の思想を現はして居りはせぬかと思ふ。論語に依つて考へて見ると確かに原始的唯一神教の天が現はれて居ると思ふ。これは必ずしも天其の儘を論じたのでなくして、堯といふ偉い名君と相對して論じたのでありますけれども、天の偉大なこと、其の天は漠として捉へることも出来ぬもので即ち原始的唯一神教の係を存して居ることがあると思ふ。『子曰、大哉堯之爲君也。巍巍乎、唯天爲大唯堯則之、蕩々乎民無能名焉』斯ういふ風に論じて居る。又中庸に孔子の言葉として斯ういふことを言ふて居る。『子曰聲色之於民末也。詩曰、德猶如毛、毛猶有倫、上天之載、無聲無臭至矣』と云つて、天の事を考へて居ることが分るのであります。此等の點から申しますと孔子の所謂天と云ふものは、支那人の古い時から有つて居つた原始的唯一神教の神として拜して居つた、其の天の考を繼承されて居るといふことが分るやうに考へる。

その所謂天は全體どういふものかといふことを更に分拆して考へると、孔子は天を主宰者といふ風にお考へになつて居つたやうに思ふ。それを小さく種々の方面から擧げて居りますが、先づ第一に其の天が人間を支配し主宰するといふのであります。人間の一人の行爲を知つて居るものである。支配する爲には知らなければ出来ませぬが、人間の行爲を知つて居らるるやうに思ふ。天は人間の行爲を知る、譬へば論語の内に孔子は何を云つてゐるかといふと、『不怨天、不尤人、下學而上達、知我者其天乎』と書いてゐるのである。又天を欺くことは出来ぬといふ考を有つて居ります『吾欺誰、欺天乎』といふこと

を言つて居られる。天が人間を主宰するに當つて、人間の一舉一動を無形の内から承知して居るといふ信仰が茲に現はれて居ると思ふ。随つて天は人間の行爲を監督して居るといふやうなことも孔子のお考の中にあるやに思ふ。それは譬へば論語を讀んで見ると、『子見南子、子路不説、夫子失之曰、予所否者天厭之、天厭之』孔夫子が不都合な人間に面會をされた。それに對して子路は悦ばなかつた、さういふ人間には面會されない方が宜からうといふ考を有つた所、孔子はお會ひになつた。併し孔夫子は之に誓つて予が否とする所天之を厭てん、若し悪いことをするならば必ず天が之を罰すると自分は信ずると、斯ういふことを言つてゐる、此處は天が人間の行爲を監督して居ることを明かにして居る。或は『獲罪於天無所禱也』と言ひ、或は又『太宰問於子貢曰、夫子聖者與。子貢曰、固天縱之將聖』是れは學者の中にも議論があるやうでありますが、朱子の註に據れば固より天之を許すに聖を以てすといつて居る、許すも許さぬも天の意にあるといふことが現はれて居ると思ふ。同時に天は人感的であつて人形的でないのであります。

そこで孔子の教が宗教であるか徳教であるか、その處に疑問が生ずる點であると思ふ。宗教の神様は多くは人間の形を以て現はれる、無論是れは譬喩的のいつたのであります。眞宗では阿彌陀如來はどういふ方かといふと、西方極樂淨土のシンボルを借りて、譬喩的に人間が池の中に船を浮かべ花の上に立つてゐるといふ風に神を現はし、それが極端になれば希臘の宗教はそれが最も能く現はれて居りまして、美術

の進歩と共に今日から言つても非常に美術の粹を現はしたやうな神の像がある。例へばアポロン、ゼウスの像の如き立派なものが残つてゐるが、さういふ風に人間的の神を拜すといふのが、一般の宗教を通じての特色だと思ふ。所が孔夫子の天といふものはどうも人間的にお考へになつてをらぬやうであります。孔子は之を上帝若くは天といふてをられますが、その天が今申したやうな眞宗の阿彌陀如來、或は希臘のアポロンの神とか或はゼウスの神とかいふやうに、人間の行爲をするやうな風には孔夫子は考へてをらぬ。併ながら人間と同じ様な感情を有つてゐる、人間と同じやうな精神作用といつても宜い、それが人感的で人形的でないと感じて御承知になつてゐるといふやうな考が、孔子のお考への中に充分現はれてゐると思ふ。それでありますから孔夫子の神が天人のやうに羽が生えて天を飛んで歩くといふ考はないが、何でも能く承知して人間を主宰し、人間の行爲を監督することは前に申した通りで、天はさういふ方である。それであるから孔夫子は斯ういふやうなことを言つて居らるる、『天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉』若し何をかいへば人間と同じで口も利かなければならない。人間の形を取る譯になります。天何言哉で黙つてお居でになるけれども、春が來れば花が咲いて錦を織つたやうになる。秋が來れば山が紅葉して錦を織つたやうになる。其の變化の工合が几帳面にそれを行つて居る。天は人間と同じやうに物を考へて居る思想を能く現はして居ると思ふ。さういふ點を孔夫子は更に一步を進めて道徳的にお考へになつて居ります。さういふ風に天然物を成長させ或は種を下して行き、春になれば物が成長し冬は枯れて行く、

これは四時の變化で萬物を成長させ或は萬物を枯らして行くばかりでなくして、其の天は矢張り道德的の意味をもつと言つて居る。孔子は論語の内に何といつて居るか『天生_三德_二於_レ予、桓_二魑_一其如_レ予何』斯の如く自分は聖人を以て任じて居るので、自分のやうな有徳な者を如何ともすることは出来ない、天から命ぜられた道を實行するものであるから、如何に悪者と雖も予をどうすることも出来ぬといふ抱負を有つて居られた、其の徳を我に生ずといふのは、其の徳を生ずのは天にある、其の道德に依つて起る本は天にあると考へて居ることは此等の言葉に依つて推察することが出来やうと思ふ。

(丙) 孔夫子の神の信仰

以上述べました所で大体孔夫子の天に對する御考はお分りと思ふ。孔夫子はそれと同時に當時の支那人が信じて居つた神様を信じて居つたやうに思はれる。希臘の方で考へて見るとソクラテスであります。ソクラテスは一方から言へば最早一の神の信仰に達してゐるやうに思はれます。併し希臘の昔の宗教に現れた神を絶対に否定して居らない。孔夫子もそれと同じく支那人が古來から信じて居つた神を否定してゐない。これが極端な一神教であるといふ神の信仰に達した時には、他の神は神でないといつて之を否定するのが一神教の特色であるが、其の一神教は神人の懸隔教から現はれてゐる。マホメツト教は一神教である基督教も一神教であります、これは前申した懸隔教から出た教で、それが進むに隨つて一神に對する信

仰が極めて強くなつて參ります。これは歴史上明かな事實であります、同格教に於て一神同體のことが現はれます。婆羅門教でも一神の考が現はれてゐる、其の裏には汎有神教といふ考が伴つてゐる。隨つて其處に昔から信じて居つた神々を否定しない調和的一の哲學上の論據を有つやうに出来て居るのが、神人同格教のものであります、佛教がそれでもあります。多神教と手を握り得た點であると思ふ。孔夫子もその點に於ては矢張り一神教の極端なものといふよりも神人同格教の方に屬するものと考へるので、其の意味で孔夫子は矢張り從來支那人が信じて居つた多神の考を全然否定されずに、又御自身もその神を信じて居られたやうに思ふことが論語の中に現はれて來ると思ふ。先刻祖先のことをお話ししましたが、その本家本元は支那である。その點から段々考へまして支那人の宗教信仰、それは神人懸隔教か同格教かといふに、同格教であると思ふ。日本なども先祖の靈を祀る、祖靈崇拜がありました、支那が本家本元である。日本で富士山の神を祭り筑波山の神を祭れば、支那でも五岳を祭り或は泰山を祭るといふやうなことで、日本と能く似て居りますが、支那人の思想も日本人と同じ神人同格教に屬するものと考へる。其の點に於て印度希臘羅馬あたりのアリヤン人種と似た信仰があると思ふ。

(丁) 神人接觸の意識

その點に於て孔夫子の神の信仰は、天以外の色々の神様を古來の支那人が信じて居つたやうに、夫子自

らも御信仰と見る。例へば論語の内に孔子が神を祭る所を書きまして『祭如在、祭神如神在』といはれて居る。此の神様は先祖の神もあり山川草木の神もあつたか知れませぬが、さういふ神をまつる時には如何にも其の神様が實際居らるるやうに之を祭つたといふことを論語の中に書いて居るのであります。日本の學者の平田篤胤の如きはさういふ信仰の厚い人である。神を祭る状況を門人が見て、本當に神が居らるる如くして居るといはれた。今日釋奠の式に列して見ると矢張り神官がお出になつて神降しをやられた。即ち孔夫子以下の靈を彼處に招じてそれをお祭りする、茲に神人の接觸道交が立派に現はれて居ると思ふ。是れが宗教意識の特色であると申しますが、それは立派に現はれるので、私共が此の釋奠を観察すると、釋奠の禮は宗教意識の一の發表でありまして、孔夫子の靈を招じてお祭りになるのでありますから、神人の特殊の關係を立派に現はして居る。その意味に於て西洋の學者が儒教を宗教史の中に取入れて考へるのも無理はないと考へる。孔夫子自ら神を祭る時に唯だ告朔の氣羊でお祭りになるのではない、本當の神が其處に在る意味を以て神人接觸の考を以て祭るから『雖疏食菜羹瓜、祭必齊如也』或は『禹吾無間然矣、菲飲食而致孝乎鬼神』といつて禹王を褒めて居るのも、非常に感服されて居るので、禹に對して昔の聖人祖靈崇拜を失はないものと考へになつたことを明かに示したと思ふ。それから又孔子は武王周公などを批評致しまして『武王周公其達孝矣乎、春秋修其祖廟、陳其宗器、設其時食、事死如事生、事亡如事存、孝之至也。郊社之禮、所以事上帝也、宗廟之禮所以祀乎其先也、明乎郊社之禮禘

嘗之義、治國、其如示諸掌乎』と書いてあります。天地の神を祭るとか、禘嘗の義或は祖廟の禮とかいふことは、皆祖先崇拜とか、四時を司る神を祭るとかいふやうな宗教行事であります。それをちやんとやつて行つて初めて國も善く治まるし、物を探るが如く能く人民を治めて行くことが出来るといふことを孔子が考へて居らるとすれば、天地の神々或は先祖の神々を信じて居つたことを明瞭に見ることが出来ると思ふ。

孔夫子は天以外に斯ういふ神の信仰を有つて居つたやうに私は考へる。此處が儒教若くは孔夫子の教に宗教的要素があつて、西洋の學者が矢張り宗教史の中に取扱ふ所以であると思ふ。加之宗教の一の特色は神と人間の接觸道交といふ所にある。自分一人で居るのではない、神と共に居るのだといふのが神人同格教の特色であります。孔子は『不與祭如不祭』といつて居る、自分がまつることに依つて神人同格を自覺するのが大切であるといふのは、神人道交を信じて居らるるからである。又『鬼神爲德、其盛矣乎、視之而弗見、聽之而弗聽、體物而不可遺、使天下之人、齊明盛服、以承祭祀、洋洋乎如在其上、如在其左右』で、其處に神が現はれて前にも後ろにも居る、左右上下に神が在るやうになつて來て、本當に神があると言はれた時には、神人道交を體驗したので、これが孔夫子の教が宗教的の特色のある點であらうと思ふ。さういふ宗教意識を西郷南洲の如きは、人を相手とせずして天を相手とするといつて居るが、其の中に安心立命をされて居つたやうに思ふ。此處に孔子の天が聽てそれが天命であるとい

ふ考と結び付いて来る。

(戊) 孔夫子の天——天命

孔子は上帝天として人形的ではないが人感的である、同時にそれは天命、西洋の言葉でフェート、デイスチニー (Fate destiny) 其處に孔子が安心立命を求めて居つたと思ふ。それでありますから『天之未_レ喪_レ斯文_一也、匡人其如_レ予何』といふ風に、其處に自分の天職もあり、自分の本來の運命もあるといふことを自覺して、悪い匡人に當つてお出になる。或は天を直に天命といふ風にお考へになつた。『孔子曰、君子……畏_レ天命……小人不知_レ天命而不畏也』といつたやうに、小人は無鐵砲なもの、君子は天を自覺するといつて、或は『死生有_レ命富貴在天』或は『不知_レ命無_レ以爲_レ君子也』又『道之將_レ行也與命也、道之將_レ廢也與命也、公伯寮其如_レ命何』これは天命の考を充分に言ひ現はして居るやうに思ふ。天は聽て天命なりと云ふことが出来やうと思ふ。

(己) 孔夫子の得脱 (安心立命)

さういふ天命を信じて其處に安心立命をされた、其の天命の信仰は聽て上帝の信仰に溯ることになる、『子之燕居、申々如也、天々如也』家に居る時も自ら光風霽月の如く、今日の言葉でいふと餘裕綽々、或

は論語の中に孔子が『飯疏食、飲水曲肱而枕之、樂亦在其中矣、不義而富且貴於我如浮雲』斯ういふことをいつて居られる、此の不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し、此の考を今日の政黨者流などが有つて呉れたならば變な問題は起らずに済みはせぬかと思ふ。茲に孔子の眞に天命を信じ眞の信仰の下に偉大な人格を發見することと思ふ。孔子自身がそれであるから弟子の顔回を信じて『賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷不堪其憂。回不改其樂賢哉回也』といつて顔回を非常に賞讃したのは、聽て自身の境遇を露出して居るといつても宜いと思ふ。又『子欲居九夷、或曰陋如之何、子曰、君子居之、何陋之有』といふ風に安心立命されて居るといふことを見ることが出来ると思ふ。或は其の立場から行きまして『君子坦蕩々、小人長戚々』で君子の胸中如何に光風霽月の趣きあるを示す、之に反して小人は始終クヨクとして居る、何をクヨク、河端柳といふ状態が小人の境涯である。それでありますから『朝聞道夕死可也』で眞に其の道を聞いて道と一緒になつた人は、最早眞理の最高徹底者である。其處には死はない、不死の境涯であるから、肉體の死何かあらんで、朝に道を聞いて夕に死すとも可也といふ安心立命が出来たのであらうと思ふ。此の點からいへば宗教上の安心立命と殆ど大差ない、即ち釋迦の安心立命も耶蘇の安心立命も、孔夫子の安心立命も大した相違はないと思ふ。其の淵源は結局天の信仰に溯ることが出来るので、其の天なるものは支那人の宗教意識に現はれた、これが矢張り神である。斯ういふことがいへると思ふ。普通の言葉でいへば神だが、印度の人間は佛陀だといふ言葉を使ふ。支那人は一種の國民性

があつて希臘とも猶太とも違ふ。そこで孔夫子の信仰が起つて来る。殊に世界的に達観すれば宗教的にな
て來るといふ。さうして信仰は孔夫子の如く大悟徹底した人は恐らく皆茲に行くのでありますが、西郷南
洲もさうであります。近い所では乃木大將もさうであらうと思ふ。乃木大將が那須野に閑居して居られた間
に、軍人の有名な人が尋ねて行かれて、其處へ一首の歌を書き残して歸つた。「世の中になすべきことの
多かるにこんな所で何をなすのか」乃木大將の那須の別荘といへば詰らない農家で廣漠たる原野の中に建
つて居つた茅屋である、何陋之有といふ考で彼所に居つて眞に子之燕居は天々如たるの状況で居られた、
將軍は歸つて來て直ぐ返歌を書いて送られた。何と云ふのかと云ふと「なすこともなくてなすのに住むわ
れはなすといもくても尻をこく」是亦眞の道の本體に達する心境が其處にあると思ふ。其處に眞の安
心立命がある。西郷南洲翁が天を相手として人を相手とするなど言はれた所と相對して、孔子の安心立命
を更に昔に溯つて考へると、矢張り其境涯に達せられたので、丁度釋迦が一國の王様の位を全く打棄て、
仕舞つて、一介の比丘になつて其處に安心立命の要諦を認めて居らると同様の趣きがあると思ふ。さう
して最後は天の信仰に入つて行つたと思はなければならぬ。

(庚) 孔夫子の教と其人格

そこで最後にもう一つ加へて置きますが、宗教の開祖といふものは大概不可思議なものとされる。其處

には最も面白い傳説などが附加はつて怪物のやうに見られるのであります。それは詰り普通の人間よりも
偉い人間が此種の神の位地を占めたといふことを現はす爲に神話的の潤色を施して、遂にそれになるので
ありますが、釋迦は人間であつたけれども神の中の一偉い神様の位地に達した。耶蘇はどうであるかと
いふと、神それ自身でなかつたけれども、神の子である所まで進んで來た。それには猶太人が元來奇怪な
事が好きである爲に、耶蘇も随分人間に出來ない奇蹟を實行したことが傳記の中に書かれてあります。獨
りこれの少いのが孔夫子である、さうして比較的迷信の分子が少い、一般の宗教には迷信が多いが孔子の
教は迷信が少いと稱せらるるのであります。聖人であつて神様ではない、人間中の偉い人間、儒教から云
へば聖人といふ言葉でいひ現はされて居るけれども、孔夫子の考の中には宗教的の要素のあることを天
の信仰に依つて分拆し、又孔夫子自身が一般の支那人と同じやうに、色々の神をも信じて居られた。其處
で孔夫子の宗教意識といふことを例證する御話になりますが、さういふ方が儒教の御開山になられたの
でありますから、他の宗教を作つた所の釋迦とか耶蘇とかいふ風に、神の事とか或は佛とか即ち人間と違
つた方面がありはせぬか、さういふ点が全然ないかと考へて見ますと、釋迦や耶蘇と同じやうに極端に超
人間的にはなつてお出にならぬが、矢張り其の方面が全然缺けては居ないと思ふ。

それはどういふ點にあるかといふと、支那の民族性が印度の民族とも違ひ、或は猶太の民族的宗教心理
と違ふから、孔夫子を耶蘇や釋迦の如く祭り上げなかつたが、宗教意識を充分に持つて居られて、それが

儒教の開山になられた御方であるから、それを最後に擧げて置きましたが、孔夫子の人格が懸て普通の比較宗教上の言葉でいへば神格の位地に登られたといふ方面を斯ういふ風にいひ現はして居る。「子貢曰、譬_二之宮牆_一也、及_レ肩窺_二見室家之好_一、夫子之牆數仞、不_レ得_二其門_一而入_レ不_レ見_二宗廟之美百官之富_一、得_二其門_一者或寡矣」と書いてある。牆に譬へて見るならば子貢のやうな牆は肩位しかないから窺けば中が見へる、孔夫子の牆は非常に高いから、如何に丈の高い者でも門を入つて行つて初めて孔子の人格が如何に立派か見ることが出来るといふことを形容して居りますが、更に一步進んで子貢は譬喩を以て孔夫子の人格を讃嘆した。「他人之賢者丘陵也、猶可踰_レ也、仲尼如_二日月_一也、無_レ得_二而踰_一焉、人雖_レ欲_二自絶_一、其何傷_二於_二日月_一乎、多見_二其不_レ知_レ量也_一」といふて孔子を日月に譬へて居る。一般に賢者といはれて居る者は畢竟山の高さに比すべきものだヒマラヤ山が高いといつても、之を越して西藏に行くことも出来るが、孔子だけは群を抜いて居る。逆もどうすることも出来ぬ。恰度日月のやうなもので登らうといつても登れぬ今日飛行機が発達したが月の世界に遊ぶことは出来ないものであつて、孔夫子は我々人間と世界を異にして居るやうな偉い方であつて全く種類が違ふ。山は如何に高いといつても只程度の高さに過ぎない。日月は人力に依つてどうすることも出来ない。其の日月の位地を孔夫子が取つて居ることを子貢が述べて、孔子だけは特別な人格者であるといふ點を明かにした。耶蘇の教の場合に於ては其の開祖を特別に神の子といつて居ります。耶蘇は神の長男である、長男は跡取りで特別な意味に於て耶蘇と他の一般の人間とを區

別するといふ點から神の子といひ、釋迦の場合に於ては釋迦自身が婆羅門が理想として居つた梵天よりより以上の神に登られたことに於て佛教を開いて來た。斯ういふ風に各宗教の開山は其の意味に於て、普通の人間とは種類が違ふといふ位地に登られて、それが崇拜の對象になつて居る、孔子の場合も稍々それに近いと考へる。印度の民族や猶太の民族は餘程詩的創造に富んで、其の開祖を詩化するといふ所に一の色があるのでありますが、支那の民族にはそれが乏しい。それで猶太印度は詩的であるが、支那人は散文的でありますから、之を擬人化して、他の宗教の開祖の如く祭り上げることをしなかつた。其の結果遂に孔夫子のやうな偉い御方、耶蘇に比べ釋迦に較べて遜色のないやうな立派な御方を讃嘆するのに、全く種類の違つた日月に比較して、孔夫子の人格を子貢が讃嘆して居るのではなからうと思ふ。茲に又孔子の人格の非常に高い、人格といふよりも我々宗教學者の言葉でいへば神格の發現を見ることが出来るのではなからうかと思ふ。

孔子は支那の方でありますけれども、全く支那とは違つた日本にまで其の教が這入つてさうして明治大正の今日まで違つた人種の中に、偉い聖哲若くは聖人として尊崇せられて、毎年釋奠の實行を見る所以であつて、其處に孔夫子の人格が千載不磨の尊いものをお持ちになつて居ることを我々が想見して、其の徳を讃嘆しなければならぬと考へるのであります。期ういふ方面を種々平素から考へてをりますから、聊か其の一端を御話して今日此の席にお招きに與りました責を塞ぎ、又諸君と共に孔夫子の徳を讃嘆し、

又自分も學んで以て聖人に近づきたいと思つてをりますから、一步一步の修養を怠らぬ用意にもと存じまして、此等の蕪言を述べました次第でございます。跡に吉田先生の御話もありますから私の講演は是れで終了致します。(終り)

眞の偉人

文學博士 吉田靜致先生

孔夫子が眞の偉人であることは言ふ迄もないのであります。只今加藤博士から段々御話のありましたやうな譯で、私から特に眞の偉人である、人格の御方であると云ふことを更に附加して申す必要はないのであります。其の眞の偉人と云ふ意味に就て、偉人と云ふのはどう云ふものであるか、其の偉人の内でも、本當の偉人と云ふのはどう云ふ意味のものであるか御話して見や斯う、斯う思ふのであります。

世の中には色々の考の人があつて、偉人などと云ふものはあるものかと云ふて、偉人と云ふ意味を否定するやうなものもあります。さう云ふ考の思想家は人間の尊嚴なる所以を理解し得なかつたものなのであります。人間は他の動物などとは違つて尊嚴性を備へて居るものである。然るに其の尊嚴性を理解し得なかつた或學者は、人間と云ふものは動物と同じやうなもので、早く申せば何等の原動力とはならない、只種々の條件殊に社會的條件に依つて操られて居る人形の如きもので、どんな偉いことをしても其の人が偉いのぢやない、其の代り悪いことをしても其の人が悪いのぢやない。色々の條件が然らしめたことであると云つて、詰り人間其の物に何等是れと云ふ意味のある原動力は認められないと、斯う言ふのであります

さうして随分屁理屈を言ふて居る、恰度角力を例に取つて言ふならば、相手に勝つた、勝つたと云ふけれども勝つたと云ふことは偉くはない。負ける者がなければ勝つことは出来ないぢやないか、即ち其の勝つた原因は負ける者があつたからと云ふのでありますして、何も勝つたのぢやないと云ふ、斯んな屁理屈を言ひます。陸上競技等で一等賞と云ふやうな譯で大變に表彰されるけれども、何も其の人が偉くはない。二等賞以下の連中があつたればこそ、一等賞が出て來たのであるから其の人ばかりを第一等の物として表彰することは理屈がないと云ふやうなことで、偉いと云ふて其の人に偉いと云ふ意味があるのではないと云ふ、詰り偉人と云ふことは全く無意識な言葉だと云ふのであります。そこで其様な分らないことを言ふ者に對して無論反對論の出づべきは當然であります、其の反對論の主張者中の或者は斯う云ふたのである。人間は何等の原動力でないと云ふけれども、偉人が原動力だと云ふのであります。社會の進歩文化の發展と云ふことは偉人と云ふ原動力に依つて始めて可能となる。斯う云ふ偉人論を唱へた學者がおります併ながら其の偉人論を稱へた學者も終には間違つた結論を出すに至りました。其の人の説に據ると少數の偉人だけが原動力となるのでありまして、其の他の大多數の者は則ち凡人なりと云ふて居りますが、凡人は原動力でない、零だと云ふ結論になつて居るのであります。さうすると私のやうな者は凡人でありませうが凡人は矢張り人間の中の一員でありますから、前の分らない理屈を言ふ人の説に據れば人間は原動力でない、零だと云ふのだから、私のやうな者は矢張り零で原動力でなし、又それに反對して偉人論を稱

へた人の説に據つても、少數の偉人だけは原動力だが、大多數の凡人は矢張り零だと云ふのだから、私の方になつて仕舞ふ、甚だ心外千万に思ふのであります。凡人だからと云ふて何も凡人をくさした者に反抗する意味ではない、正しき理屈の上から言ふのでありますから、跡で申しますが、如何に凡人でも苟も人間であるならば立派に原動力である社會の進歩に貢献し文化の發展に寄與することが出来るものだと云ふことを、是から説明して見たいのであります。

そこで偉人論を稱へた人は偉人と云ふ言葉を、最適者と云ふ言葉に對立して用ゐて居るのであります。其の最適者と云ふのはどう云ふ言葉かと云ふと、是れは動植物即ち生物の進化と云ふことに關係して用ゐらるる言葉であります。動植物即ち生物と云ふものは進化するものだと云ふのであります。其の進化を云ふことに最適者と云ふことが關係して來るのである。是れは既に多數の諸君は御承知のことでありませうが一應説明致します。動物は生れ過ぎるのであります、子供が殖え過ぎる、植物の子供と云ふのは可笑しいけれども植物も親の體から別れて來るものが澤山あり過ぎるのであります。そこで便宜動物的の言葉を使つて子供が生れ過ぎると云ふやうに申しますが、其の生れた子供の居る場所がないのであります。そこでどうしても大多數は死ななければ納まりが付かない、けれども誰も其の死ぬる方を引受けやうと云ふものはない。其の結果は皆生きて居たいと云ふので、茲に誠に困つたことであるけれども所謂生存競争と云ふ事實が湧いて來るのであります。此の生存競争と云ふことは他の言葉に言換えると詰り他の者を成る可く

死ぬるやうにさせて自分だけが生きて行かう、他の者を倒して自分を立てやうと云ふ競争で、甚だ質の良くないこととありますが、是れが動植物に認められる避くべからざる事實であります。そこで其の生存競争の結果か何うなるかと云ふと、最適者残存と云ふことになる。言ひ換ふれば生活の境遇に最も適する者が生き残り、適せざる者が死んで仕舞ふと云ふことである。即ち優勝劣敗と云ふことになりませう。そこで其の生き残つた最適者がどうなるかと云ふと、是れが又子供を生むと云ふことになる。其の最適者から生れた子供には親の勝れた性質が遺傳するのであるから、生れた子供等は可なり勝れた連中でありませうが、是亦生れ過ぎるのであります、どうしても全部が生きて行く譯にはいかぬから、己むを得ず此等の者の間に生存競争が行はれる、其の中でも比較的最も勝れた者だけが生き残るのであるから、餘程勝れた者が生き残る理屈である。其の者が又子供を生むのであります。さうすると生れて生存競争をし其中で最適者が生き残り、又生む、生存競争、何遍も繰返して居る。随つて生物と云ふものは代を重ねれば重ねるほど段々生活境遇に適するやうに變化して參る、其の變化を名づけて生物の進化と云ふ、其の道理が即ち進化論である、其の進行と云ふことに關係した言葉であります。今申しました最適者と云ふ言葉に對して偉人と云ふ言葉を用いたのである。此の偉人論を稱へた人は今申したやうな譯で、最適者と云ふのは詰り自己本位的なのである。自分が生き長らへて行く、自分が優勝者となるに就て都合が良い性質を具へて居るのが最適者である。他の者を倒して自分を立てる自己本位、自利的のものに於て勝れた者である。さう云

ふ者が生き残つて子供を生んで又生存競争する、其の中の勝れた者が生き残ることをしなければ、進化は生じて來ませぬから、生物の進化と云ふことのある爲めには、自己本位的な最適者となつて生き残る者が必要ならぬのであります。最適者となつて生き残つただけではまだ足りない、子供を生まなければならぬ。折角最適者となつて生き残つたけれども、それぎり死んで仕舞つて種子を残さなければ進化には没交渉となつて仕舞ふ。進化に貢献すると云ふ意味になる爲めには、無論最適者となつた上に更に子供を生んで其の性質を遺傳しなければならぬと云ふことは分りきつたこととありますが、兎に角最適者と云ふものは自己本位的の性質のものであります。

之に反して偉人論を稱へた人は、偉人の意味を全くそれと正反對に解釋した。どう云ふ風に偉人の意味を解釋したかと云へば偉人と云ふのは他の人々に教育を施し感化を與へ影響を及ぼして他の人々をして他の意義のある生活をさせる、其處に偉人の偉大なる事實を生み出す。自分が自分の爲に活動すると云ふことを言ふのでなくして、他の人々の上に感化影響教育を與へ及ぼして、他の人々の頭腦を通し他の人々の手足を通して意義ある生活を爲させるやうな働きをする。其處に偉人の意味を生み出さうとしたのである。是れは自己本位ではないのであります。他の者に影響感化を與へると云ふ意義が最も大切なことになつて來る。そこで最適者と云ふことと全然反對の側の偉人と云ふ意義を打立てた、私は頗る同感なのである。併ながら其の偉人論を稱へた人は、さう云ふ者は人間の中の少數に限られて居ると云ふた、其の少數の偉

人が他の者に感化影響を及ぼし、随つて社會に貢献し文化の發展に與かる所の原動力となるけれども、凡人はさう云ふ原動力でない零だと云ふが、偉人と凡人とは紙一枚の差に過ぎないと説く人もある。さう云ふことであれば私の考では人間は皆偉人だと言はなければならぬことになると思ふ。其の事を一應御話を致します。

詳しい理論を述べるには充分の時間を頂かなければならぬ、それは本日は省くことに致しまして、人間と他の動物と違ふ點を今の問題に關係する方面だけで一寸申しますと、人間には理性の働きがある、思慮分別を爲し推理の作用を行ふ、さう云ふ理性の働きを備へて居る、同時に言語の作用を有つて居るのであります。理性的潜在物であると云ふことは、それと離れずに言語的存在的と云意味を有つのであります。他の動物にも言語に似たやうなことを言ふ犬はワン猫はニャアと言つて居るけれども、あれは言語ではないのであります。あれは叫聲と云ふのであります。叫聲と云ふのは只氣分感情を現はすだけに過ぎないので、言語の如くに思想の内容を發表傳達すると云ふやうな深遠な働きを有つて居るのであります。言語にも色々あります。口で喋舌るのも言語であり、文字で書くのも言語である。詳しく言へば身振りも言語であります。手指の運動、顔面筋肉の運動をして思想の内容を發表傳達する、言語と云へば言語であります一杯飲まうと云へば斯んな身振をすれば直ぐ分るのである。兎に角言語と云ふものを用ゐて思想の内容を發表宣傳することは、人間の靈妙な働きを能く示して居るのであります。叫び聲と言語との差別を極く通

俗的な方面だけを申せば、叫び聲は世界中何處へ行つても同じと云ふ特色がある、世界中の鼠は皆チユウ／＼猫はニャアと云ふこになつて居る。若し世界の何處かに僅か一匹の鼠でも宜しいがニャアと云ふものがあつたら是れは學術上の一大革命を呼起すことになる事實であります。けれどもそれはない事である。人間も叫び聲を有つて居ります。悲しくなつて來ると其の極泣き聲を出しますし、可笑しくなつて來ればアツハ、とかヒツヒツヒツとか云ふ叫び聲を出します。叫び聲は世界を通じて皆同じであります。佛蘭西へ行つても印度に行つても可笑しくなればアツハ、であります。けれども言語は違ふ英語、日本語、佛蘭西語、支那語、同じ日本の中でも方言は又夫々違ふ。違つ社會に違つた現象を以て發展して來て居る、其様な意味の言語は他の動物にはないのであります。そこで其の人間獨得の言語と云ふものを仲立として、思想の内容を發表傳達して他の人々に教育を施し、感化を與へ影響を及ぼすと云ふ尊き事業が營まれるのであります。是れは他の動物にはないのであります。其の他の者に感化影響を及ぼすと云ふ此の働きあるに依つて、初めて社會の進歩文化の發展が出来るのであります。

先刻生物の進化のことを一寸申しましたが、私の申したことだけを御聞きになつて居ると、如何にも進化と云ふものはズン／＼捗るやうにお聞きになつたか知れませぬが、決してさうではない。進化と云ふものは極めて鈍いものであります。是亦通俗的に一寸説明致しますが、御承知の通り人間よりは鼠の方が繁殖が熾んなのであります。俗に鼠算と云ふ程でドン／＼殖えることを申しますが、それほど生れ過ぎるの

でありますから、人間よりは生存競争が激しい譯であります。随つて鼠の方には優勝劣敗も激しく、進化が捗つて居る筈であります。然るに鼠がどれだけ變化して來ましたか、歴史あつて以後の事だけに限つて宜しいが、二三千年以前の鼠と今日の鼠との間にどれだけの違ひがありますか、私は知りませぬ。諸君の中に御承知の方があるならどうぞ教へて頂きたい。餘り大した違ひはなかりさうに思はれる。然るに鼠ほど進化して居らない筈の人類社會に於ける進歩發展と云ふものは實にまばゆきばかりに迅速であります。それは進化ではないのであります。進化と云ふのは生物學上の變化であります、生物の方面に於て人間も多少進化して居ります。無論進化して居るに相違ないけれども、要するに鼠の繁殖より遅いのでありますから、鼠の二三千年の變化が目に着くとすれば、人間の進化は殆ど目に着かないものであらうと思はれるが、所謂社會の進歩文化の發展になると、是れは實に速かなものである。四五十年前の社會の状態と今日の社會状態とを比べて見たら實に驚くべき進み方と言はなければならぬ。此處十年間に於てさへ驚くべきであります。否二三年間に於て實に驚くべきものがある。是れは何に依つて居るかと云ふと、決して生物の進化として説明すべきものではないのであります。人間は勿論生物と云ふ方面も有つて居ります、同時にそれが人間の特性と言はるべきものがあります、精神生活と云ふ方面を有つて居る。其處には理性の働きが言語の作用を具へて居る譯である。其の方面に於て只今申したやうに他の人に教育を施し、感化を及ぼし影響を與へると云ふことがあるのであります。各國に教育が行はれるのも其の爲めである。即ち今

日のやうな貿易の開かるるのも人間であればこそであります。其の他新聞雜誌の發行種々の事業が行はれて居る、さう云ふことの爲めに社會の進歩文化の發展と云ふことが著しく捗取ることになるのであります。さうして其の社會の進歩文化の發展と云ふことには、彼の生物の進化の場合に於けるやうな最適者となつて長生をして残存する必要は少しもない、又子供を生む必要もない。宗教の開祖中の人々には割合に早く亡くなつた者がある。中には焼殺されたり、槍で突殺されたやうな者もある。決して是れは最適者として残存したとは言はれべきものでないであります。不幸な目に遭つて早く亡くなつて居る、又夫等の中には子供を残さなかつた者が大分あります。さう云ふ人は進化には微塵も貢獻して居らぬ、進化と云ふことには全く没交渉の人であります。けれども其の人の存命中に説法したことが其の後の人類に偉大な影響を與へたと云ふことであれば、社會の進歩文化の發展には偉大な貢獻をした人であります。進化といふには最適者として残存することが必要條件であり、子供を生むことが必要條件であるが、それは文化の進歩社會の發展には關係のないことである。言語を通して他の人々に感化影響を與へ教育を加へて行くことが出来れば、其處に進歩發展に貢獻する意味がある。進化といふことは全く違つた方面の精神生活の領分に於て偉大なる仕事を爲すことが出来るのであります。其處に偉人の意義がある、最適者とは違つた方面に於て偉人の意味のあることを理解しなければならぬのであります。

そこで偉人の意味が其の様に他の人々に感化影響を及ぼすことになるのと、さういふ働きは何れも

人格の人と言はなければならぬ。只程度の違ひがあるだけであります。人間は今申した通り言語の働きを具へて居る、さうして言語を仲立として思想の内容を傳達發表することが出来る。さうして他の者に感化を與へ教育を施すことが出来る。少しよか影響を及ぼさない人もあるし、又非常に大なる影響を及ぼす人もあるが、人間は皆偉人であります。併ながら小さな偉人と大きな偉人といふ區別がある、先刻申した偉人論を稱へた人の言ふ偉人といふのは大なる偉人の意味であります。其の人の言ふ凡人といふのは小さな偉人の意味であります、私に言はしむれば人間は皆感化影響力を有つて居る。其の人は少數の偉人だけが感化影響力を有つて居つて、凡人は零だと言ひましたが、其の人が間違つて居るのであります。偉人論を述べたことは正しいのであるが、頭の働き方が少し惡つたと見えて、大多數の人々に偉人の意義を認むることが出来なかつたのは甚だ惜むべきであります。我々人格は皆尊嚴なる精神生活を所有して居る。さういふ人格は必ず言語の作用を通して他の者に感化影響を及ぼすのであるが、皆只其の程度が遠ふだけあります。

そこで他の者に感化影響を及ぼすのが偉人だと申しましたが、さて其の感化影響を及ぼし方に二通りあることを此際一寸御話して置きたい。さうして無論兩方とも偉人の感化影響ではあるけれども、其の中の一方こそ本當の偉人の仕事と言ひ得るのであります。眞の偉人といふのは言葉が拙いやうであります、我々凡人も偉人でありますから、偉人中の理想的偉人といつた方が宜いかも知れない。皆人間は偉人であ

りますが、其の感化影響を及ぼす仕方に二通りある。それはどういふ影響の及ぼし方かといふと、小さな偉人のことを茲に態々申す必要はない、大なる偉人に就て申しませうが、偉人が己の理想とする所を世間に能く之を述べて、世間の者をして其の理想に一致するやうに活動せしむべく影響を與へやうといふのであります、其の影響の仕方が、斯うすべきである、斯うしなければならぬといふことを發表して、一般の者をして自分等は能くは分らぬけれども、あの人のいふことだからした方が宜からうといふ程度で早く申せば盲目的に偉人の爲せと示す所に従つて活動するといふ如き態度で、偉人の理想とする所のものを皆なが實行する、そんな風に影響を及ぼすのが、第一の影響の仕方であります。之に反してもう一方の方は偉人が理想とする所を一般の者に實行せしめるのではあるけれども、一般の者をして恰度偉人の要求して居るやうなことをば、一般の者自身がこれぞ自分等の本當に實現せねばならない理想だと、心の奥底から納得が出来て自發的に自ら進んで其の事を實行せずには居れぬといふやうな氣分にさせて、各自自身の理想を自分の力に依つて自發的に實現する態度で其の事を實行させるやうに仕向ける、其の様な感化影響を及ぼす仕方、それが第二の及ぼし方である。是れは充分に區別して置かなければならないと思ふ。縱令自分の理想とする所を實行させるにしても、お前達はどちらでも宜いから俺のいふ通りなさいといふ譯でなしに、成程然うだ是れは我々の當然實行すべきものと自發的に之を實行せしむるやうに吞込まして、進んで之を實行するといふ態度を作らせる、さういふ影響の仕方、これが私にいはせると理想の影響の仕方導き

方であると思ふ。前の方も他の者に矢張り感化影響を及ぼしたのであるから、偉人たるには相違ないけれども、後のやうに他の者に感化影響を及ぼす其の影響の仕方と比べると、大分趣きが違ふのであります。

難かしい言葉を用ひて申しますれば、跡のやうな意味で一般の者にそれが已等自身の當然爲すべき實現の理想として活動させる場合、之を道徳上のデモクラシーといふて宜いと思ふ。是れは道徳の民衆化といふことが必要であると思ひます。之に對して前者は只道徳上の偉人が斯うせよと命じた、一般の者は多くは分らぬけれども命ぜられたから爲さうといふだけで實行するといふ場合、それを道徳上のアリストクラシー、道徳上の貴族主義と考ふべきでありませう。さうして道徳上の民衆主義にして總ての者に感化影響を及ぼすのが結構な及ぼし方だと私は考へて居る。併ながら其の様に感化影響を及ぼすといふに就ては、さういふ感化影響を及ぼす所の中心の力となる所の偉人の働きといふものを、どうしても茲に考へざるを得ないのであるから、斯る中心の力を考へるといふ意味に於て、それは一種のアリストクラシー即ち貴族主義といふ意味が織込まれて居るのであります。即ち偉大なる中心勢力といふものを出發點として、それが總ての者に本當に心から會得させて眞の道徳を實行せしめる意味になるのでありますから、矢張りアリストクラシーといふ意味が其處に織込まなければならぬ。さういふ意味の織込まれたデモクラシーといふので、アリストデモクラシーといふて居りますが、それが本當の道徳實行の成立つ正しき態度と私は思ふ。或は之をデモアリストクラシーといふのであります。アリストデモクラシーといつても宜しいが

それが本當の意味のデモクラシーでもあり、又本當のアリストクラシーでもあります。今日世間に行はれて居るアリストクラシーは甚だ面白くない。總ての者が己の心から出て實現する。それはアリストクラシーといふことになる、又同時にさういふ正しいデモクラシーは今日行はれて居るやうな宜い加減なデモクラシーとは違ふ。今の宜い加減のデモクラシーは只何でも多數、數で來いといふ風に活動するものであります。さうでない矢張り其處は眞の偉人の中心の力といふものが働いて、さうして總ての者をして夫々眞の理想とする所を自發的に實行せしめるやうに影響を及ぼすのでありますから、デモクラシーではあるが、其處に立派にアリストクラシーが織込まれて居る。故に今も申しました通りアリストデモクラシーといつても宜いが、又デモアリストクラシーといふても宜しいといふのであります。是れは若い方々に向つての御話としては稍々不適當のやうに思はれますけれども、父兄が子弟を導くにも、どうぞアリストデモクラシーの態度で導いて貰ひたい、おつ被せて分つても分らぬでも宜いから何でも此様にしろといふのでなく、能く吞込まして其の實行することが若い者自身が已等の當然實行すべきものであるといふ氣分を作つて、父兄の理想として居る所に一致するやうに連れて行く、斯ういふ導き方をして戴きない。

又政治でも同様だらうと思ふ。如何に善き政治だといつても、俺の政治は善いのだといつて分つても分らぬでも宜いから何でも俺の方針通りに活動して居れば宜しいといふことでなく、總ての者に吾等は本當に斯ういふ態度で活動して行かなければならないと、自發的に進んで活動して居ることが、恰度政治の局

に當る者が善き政治と考へて居ることと一致して居るやうに、先づ以て其の政治の行はれるやうな空気を作りつゝ、而も其の善き政治と思つて居ることを行ふやうにするのが眞正の善政と思ふのである。何事でも其の通りであります、他の者に感化影響を及ぼして己の理想とする所を實行せしむるのではあるけれども、其の影響の及ぼし方がアリストデモクラシー或はデモアリストクラシーの意味のものであらしめたい感化影響を及ぼすことは結局偉人の意味になります。前の意味での及ぼし方は理想的の偉人としてはまだ足らざるものであらうと思ふ。後のやうな意味に於て自發的に其の理想とする所が普く實現される風に感化影響を及ぼす、其處に理想的偉人の意義を見出すのであります。

私の今日の話は直接に孔夫子のことに關係致して申したのではありませぬが、孔夫子は確かに眞の理想的偉人であると思ふのであります。道を弘めるにはその意味に於て道を弘めたものであらうと思ひます。我々は偉人は偉人でありませぬけれども、小さな偉人であるといふことでなく、大きな偉人となり、大きな偉人であるだけでなく、理想的の本當の偉人になるやうに、御同様修養を積みたいものだと思ふ。それは決して己の爲めといふのでない、實に世界人類の爲であります。同一体たる世界人類の爲に何とかして理想の偉人になるべき修養を積まなければならぬと思ふのであります。今日理想の偉人として尊崇すべき孔夫子のお祭の日に聊か理想の偉人といふことに關して考へて居ります一端を御話して私の責任を果すことに致した次第であります。(終り)

昭和二年十月廿五日印刷
全 年十一月一日發行

編輯者兼
發行者

足利學校遺蹟圖書館

足利市本城三丁目二千七十八番地

右代表者

大

給

新

足利市雪輪町二、五二八番地

印刷者

丸

山

芳

良

足利市雪輪町二、五二八番地

印刷所

足

利

印

刷

社

344
86

NO.

"F-M"
PAMPHLET BINDERS

are carried in stock in the following sizes

Catalog No.	High	Wide	Thickness
851(菊倍)	30.cm.	x 24.cm.	x 1cm.
852(四六倍)	26. "	x 18.5 "	x 1 "
853(菊)	22.5 "	x 15. "	x 1 "
854(四六)	18.5 "	x 12.5 "	x 1 "
855(特)	24. "	x 15. "	x 1 "

other sizes are made to order

LIBRARY SUPPLIES OF ALL KINDS

F. MAMIYA & CO.
OSAKA - TOKYO - FUKUOKA

終